提言

叱られる耐性を家庭で養う

盛岡市先人記念館館長
千田　順一

■よく叱る師

先人記念館顕彰者の中に冨田小一郎という人がいます。

大正時代に私立実践女学校を創設するなど女子教育に尽力した人で、記念館では「女子教育の父」として紹介されています。この学校は現在の盛岡市立高校の前身であり、高校の敷地内には胸像が建っていますので、目にされた方も多いと思います。

しかし、冨田小一郎はその業績以上に、盛岡中学の先生として、米内光政、金田一京助、石川啄木、郷古潔、鹿島精一など数多くの著名な人々を教え育てたことでその名が知られているようです。

校内で一番厳しい先生だったと書いている本もあるように、指導はスパルタ式で、容赦なく生徒を落第させ、北上川に生徒を連れ出し水泳でしごき、生徒の素行にも厳しい目を向けカミナリを落としました。

冨田先生は、石川啄木を三年間担任しました。啄木は当時の思い出として「時に教室の窓より、又は背後の扉より脱れ出でて、独り古城址の草に眠る。欠席の多き事と師の下口を取る事級中随一たり。先生に拉せられて叱責を享くる事殆ど連日に及ぶ。」と書いています。

よく叱る師ありき
髯の似たるより
山羊と名付けて口真似もしき

啄木

厳しい先生でしたが、人情味にあふれ、生徒をかわいがり面倒をよく見たので、生徒から慕われました。

啄木は、この先生がストライキ騒動で学校を去ったあと言い知れぬ寂しさを感じています。他の教え子たちも大臣や博士となってからもこの恩師のもとを訪れ、また謝恩会を開くなどいつまでも学恩を忘れませんでした。

■げんこつ・カミナリなくなって

さて、啄木の書いた冨田先生の思い出にある「叱責」には、時としてげんこつが伴ったであろうことは容易に想像がつきます。現在なら体罰事件として問題になるところですが、私が子供の頃にも、先生からのげんこつはありました。学校も家庭もこれを容認する風土があったわけです。

現在、学校ではげんこつはもちろん、正座など体罰は行われていません。先生方が体罰を用いないのは、法で禁じられているからだけではなく、腕力に頼る指導を避け、心に響く指導を心がけているからです。

誤解のないように断っておきますが、これから述べることは体罰を容認せよという話ではありません。子供に叱られる耐性が失われつつあるのではないかという話です。

胸像前にて
冨田先生と米内光政
（盛岡市先人記念館蔵）

昔の、少なくても自分たちが子供の頃、昭和の三十年代までは、悪いことをすれば厳しく叱られて当たり前、悪さの次第ではげんこつもありました。だから、近所のおじさんに怒鳴られたこともありますし、叩かれたこともありますが、それを恨みに思ったり、叱り方が悪いと不満に思うこともありませんでした。

現在、知らないよその子を叱れば、それが近所の子でも、「危ないおじさん」呼ばわりされるか、ひどい時はその子の親に抗議されることもあるのではないかと思います。

近年、逆ギレという言葉をよく耳にします。分別あるべきいい大人が、注意されたことに腹を立てて、相手に食って掛かり、時には暴力に訴えるということを行う背景には、小さい頃に身に着けるべきはずの、叱られることへの耐性が欠けていることも大きな要因のように思えて仕方がないのです。

■良薬を飲めない子となる

啄木たちは冨田先生などから厳しく指導されながらも先生、先生と慕ったのは、先生たち自身の人柄、人徳があったことは勿論ですが、大きな基盤として叱られる耐性があったから、先生を毛嫌いすることなく、指導に従えたのだろうと思います。

今の学校ではびしびし指導する先生、ぴしゃりとよくない点を指摘する先生は敬遠されがちです。怖い、厳しい、嫌いとなります。それは子供にとって、良薬であるのですが、口に苦いので敬遠し、伸びるべき点も伸びず、直すべき点も直らないのです。

家庭において叱る、厳しく躾けるということは、単にその場の指導効果のみならず、学校における指導、社会に出てからの教えをきちんと受け止められる素地を養っていることでもあると思います。

プロフィール

千田　順一（ちだ　じゅんいち）
- 昭和 27 年　一関市出身
- 福岡小、上田中学校教諭
- 盛岡教育事務所主任指導主事、主任管理主事
- 小屋瀬中、巻堀中、見前南中、城西中学校校長
- 盛岡市先人記念館館長